

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號五第 卷六十四第

行發日一月五年三十和昭

## 論叢

貨幣と利子

文學博士 高田保馬

支那農業の片影

法學博士 財部靜治

ソロキンの<sup>社會的</sup>過程形式論の評價

文學博士 米田庄太郎

貨幣の本質とその價值

商學士 中山伊知郎

## 時論

物價騰貴と消費節約

經濟學博士 谷口吉彥

## 研究

再保險形態の究極的發展

經濟學士 佐波宣平

中立貨幣と外國爲替相場

經濟學士 中谷實

ダンピングの理論

經濟學士 岡倉伯士

## 說苑

幕末の上海貿易

經濟學博士 本庄榮治郎

差額地代と限界生産力説

經濟學士 上村鎮威

## 附錄

雜報・外國雜誌論題

(禁轉載)

## 説苑

### 幕末の上海貿易

本庄榮治郎

#### 一、居貿易と出貿易

安政開國の後、外國貿易が從來の長崎に於ける唐蘭貿易とは異り、横濱其他に於て貨物を輸出し輸入する方法の下に行はれたことは確かに一進歩であるが、而も當時の貿易と雖、所謂居貿易であつて、我國から海外に船を出して貿易する迄には至らなかつた。萬延元年に幕府の外國掛大目付及目付から産物方と稱する一局を設置すべきことが建議されたが、その意見書には産物方の設置によつて國內産物の出來高等の實數を調査し得べく、『然上に而兼々申上候通、支那へ仕出船の御沙汰有之候得ば彼地の模様次第貿易取組も心丈夫に出來可仕』云々とあつて、支那へ出貿易を試むべき

ことが説かれた。之に對して勘定奉行及勘定吟味役等の意見は、今や既に外國貿易が開始されたのであるから居ながら彼の求に應ずるのみにては不都合であり、且『彼國香港等にて外國交易の振合にも見分爲仕候はゞ御爲筋には可相成』、殊に唐國出産の品は西洋の諸品と異り、又我國産品の支那へ向くものもあり、彼我共に便利であるから先般の建議の筋も熟慮せられ、支那へ商船を仕立てることを仰せ出されたいと述べ、外國奉行等の意見も支那への出貿易に賛成であつた。之によつて見れば出貿易のことは前から考へられてゐたことと思はれる。勿論この出貿易は貿易の必要から説かれたことではあるが、軍備の充實即ち海軍の擴充に資せんとする考と關聯のあつたことは注意すべきことであらう。<sup>1)</sup>

#### 二、千歳丸

右の出貿易は遂に實現するに至つた。文久元年九月幕府は長崎會所調役沼間平六郎をしてその局に當らし

1) 拙著、幕末の新政策、314-322頁。

め、會所出入の本商人兩三名を伴ひ商品賣買のことに従はしめんとした。種々の準備の中にその年も暮れて翌二年三月幕府は始め外國汽船を備船せんと考へたが寧ろこの際外國船を購入する方が得策なりとし、遂に英船 *Annistice* を買収するに至つた。同船は一八五五年(安政二年)英國サンダランド市に於て製造された木造帆船三本櫓の船で、長さ百二十六呎・幅二十八呎・深さ十七呎・積高三百五十八噸であつて、英人 *Richardson* の所有にかゝり且彼は船長として二年前から上海長崎間の漕運に従事して巨利を占めて居たもので、三月十二日に長崎へ入港したとき、組頭中山誠一郎・調役沼間平六郎其他が之を臨檢し、船中備附の諸道具一切と共に代銀三萬四千弗にて買収の契約をなしたが、三月十四日長崎出帆の豫定であつたから、一航海後に受渡をなすこととなり、四月十一日に再び長崎に歸着したので、十四日に長崎奉行高橋美作守は目付役以下の役人を率ゐて之を臨檢し、船名を千歳丸と改め、十八日に代銀の授受を了し、櫓上に日の丸の國旗

を掲揚したといふ。

かくて寛永鎖國後二百三十年幕府最初の官貿易が行はれたのであるが、この際の一行は日本人五十一名で即ち江戸役人五名・長崎會所役人三名・長崎地役人七名・長崎本商人三名・従者二十三名・水夫十名である。長崎在留和蘭商人トンプレンキも貿易についての臨時御雇として乗船し、船長其他の乗組英人は、アーミスチス號より引繼いで千歳丸の乗員として乗組んでゐた。千歳丸は四月二十九日に長崎出帆、航行五百七十二英里、八日目の五月六日の朝上海に着し、歸航は七月五日上海を出帆、十一日を費して長崎に入港した。即ち長崎出帆以來七十五日間で開國最初の上海貿易が結末を告げたのである。然るに翌文久三年二月幕府は同船を英船 *Victoria* と買換へるに至つた。この *Victoria* は一八五七年(安政四年)英國シッドデ市にて製造された鐵製外車蒸氣船で九四噸、六〇馬力を有し、ミストルメーニングの所有にかゝり買収價格は六萬六千弗船名を長崎丸(二番)と改めたが、本船は元治元年(一八

- 2) 川島元次郎著、南國史話、119-123頁。  
勝海舟著、海軍歴史(海舟全集第八卷) 444頁。  
造船協會編、日本近世造船史、83頁。中村孝也著、中牟田翁之助傳、204頁。  
Mossman, *New Japan*, Lond, 1873, p. 144.  
Paske-Smith, *Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days*, Kobe, 1930, p. 222-223.

六四年)十二月二日八丈島で破船したといふ。<sup>3)</sup>

### 三、上海に於ける見聞の一二

上海に到着せる一行は、その繁華なるを見て驚歎した。中牟田倉之助の「上海行日記」に『上海滞在之洋船百艘も可有之歟、唐船は一萬艘も可有之歟、誠に存外之振にて候事』とあり、高杉晋作の「航海日録」にも『此は支那第一繁盛の津港なり、歐羅波諸邦の商船軍艦數千艘碇泊し、檣花林森、津口を埋めんと欲す、陸上には則ち諸邦の商館粉壁千尺殆ど城閣の如し』と説いて居る。<sup>4)</sup>

着船の後一行は上陸して和蘭領事館を訪問し、支那官憲と應接すること前後五回、その他英米佛諸國官憲をも訪ね、會談して多くの事物を見聞し知見を擴めることが出來た。五月二十四日幕吏が和蘭公使クルースを訪ねた際の質問條々の中には次の如きものがある。<sup>5)</sup>

一、日本にては商船を派して貿易せしむるとも支那と違ひ洋銀の相場高き故に貿易の利益あらざるべ

し。如何  
一、日本産物の中、支那にて需要するものは何々なる乎。

一、此度千歳丸を以て積み越したる貨物の販路悪しく困却の至り也。何分直段安きにより、税銀を支拂ひ、入費を差引けば損毛となる。寧ろ入札にて賣却すべき乎。

一、其入札はクルース方にては出來ざる乎。

一、干鮑、鯉節の税は干魚の通りにて宜きや。

一、商賣向不景氣には困入る次第也。

尙一行は恰も長髮賊の亂を目撃したのであつたが、之に對して中牟田倉之助は次の如き記述をなしてゐる。<sup>6)</sup>

・即ち、當時市中の警戒は嚴重を極め、英佛の兵士が城門を守りて出入を監視し、門の前に支那人が集つても決して門を開かず、西洋人と見れば則ち之を開いて通行せしめた。之に對して『西洋人え相頼門番爲致候處、自國之城門も自國之人出入不叶様相成、賊亂之

3) 南國史話、142-147, 158-159頁。  
中牟田倉之助傳、214-218, 265-266頁。  
海軍歴史、444頁。  
日本近世造船史、82-83頁。  
Paske-Smith, ibid, p. 222-223

4) 中牟田倉之助傳、219頁。

5) 同上、230-232頁。  
6) 同上、225-228頁。

末故とは乍申、餘り西洋人之勢盛なること爲唐人可憐、支那之衰微押て可知候也』と述べ、また『近來段々西洋人北京へ住居罷在候由、之は後には北京城も西洋人之防方相頼候哉と被考候』と説き、『英吉利斯は表は爲清朝長毛賊を防ぐと申し、内には長毛賊に好器械などを渡し、私に耶蘇教を施し、其實は長毛賊を以て清朝を破らしめ、己清朝を奪ふ落着ならん。又長毛方には豫め耶蘇教を信じ英吉利斯などを己が身方に致し、遂に清朝の天下を奪ひ度落着なり。天下を奪候得ば英吉利斯との儀は如何とも可相成と策謀なせし様思はる』と觀察してゐることは注意すべきであらう。また高杉晋作の「上海淹留日録」五月二十一日の條にも『熟々上海の形勢を觀るに支那人は盡く外國人の便役たり。英法の人街市を歩行すれば清人皆傍に避け道を讓る。實に上海の地は支那に屬すと雖、英佛の屬地と謂ふもまた可也』と歎じてゐる。

薩州の五代友厚は水夫に身を扮し、名を才藏と稱し本船に乗組んだが、彼は上海滯在中に獨逸船ジャウジ

キリー號を十二萬五千弗にて買收して歸朝し、之を天祐丸と改稱して藩の御用船とし、その船長を命ぜられたといふ。元來彼は汽船購入の急務なるを藩主に建言したことがあり、上海渡航の際に汽船購入の命を受けて居たものと思はれる。

#### 四、上海における貿易

支那から日本への貿易は從來長崎でも行はれてゐたが、日本から支那への貿易は從來行はれたことなく、日支間の通商條約も締結せられをらず、從て今次の貿易は萬事和蘭領事に一任した形であつて、支那側も『蘭人支配なれば構無之』とし、貨物も和蘭の貨物として取扱つたものである。されば千歲丸の積荷は全部陸揚して和蘭領事館の倉庫に入れ、之に對して倉敷料を拂つたのみならず、商品賣買の取扱も凡て和蘭領事館員の手を経て行はれ、その手数料として、

- 一、日本荷物賣拂候はゞ百枚に付二ドル半づゝコンシユルへ口錢差出可申事

7) 五代龍作著、五代友厚傳、14-16頁。友厚會編、近代之偉人故五代友厚傳、177-185頁。但し後者には船名を三國丸、代價を汽船八隻の代價としてゐる。

一、唐國荷物買調候而も同様二ドル半也。尤諸仕拂  
尙又賣掛もコンシユルより引合可申事

即ち賣買共に價格の千分の二十五の手敷料を支拂つた  
ものである。又仲介した支那人にも幾分の口錢を與  
へて居る。<sup>8)</sup>

此等の貨物の販賣は思ふやうには行かず、「中牟田  
倉之助傳」には、<sup>9)</sup>

『積荷の貨物が捌けざること最も苦痛なりき。石炭  
も然り、人參も然り。人參は引き分けて賣る方然る  
べしと和蘭人注意す。幕吏歎息して曰く、直段によ  
りて引分けて賣りても宜けれど、逆も直段にならざ  
るべし。何分税銀高き處なるに長崎の相場に引合せ  
て餘りに安き故、困却の至りなり。いづれ積戻すよ  
り外策あるまじ』

とある。「南國史話」には「唐國行御書付寫并伺書控」  
に載する處の二三の計算を掲げてゐるが、<sup>10)</sup>それによる  
と三ツ石昆布は原價の約一割の利益、房寒天は三分四  
厘の利益、樟腦は一割四分七厘の損失であつた。出帆

間際に投賣したのもあり、貿易としては利益が無か  
つたもののやうである。

さて千歳丸に積込んだ商品は(一)長崎會所仕出の商  
品即ち幕府が上海に於て日本商品試賣の爲め長崎會所  
をして仕入をなさしめた商品(二)本商人仲間に於て幕  
府の許可を得て同一の目的のために準備した商品の二  
種のものを含んでゐる。これ等の商品は主として長崎  
に入港する支那船が返り荷として購入する貨物を標準  
として選定されたものであつて、それは次の如き商品  
であつた。<sup>11)</sup>

一、長崎會所仕出の分

(イ)倭物方御圍の内

煎	海	鼠	二百丸	二萬四千斤	
				代銀九十二貫六百四十目	
干	鮑	三百丸	三萬六千斤	百十貫八百八十目	
鱈	鱈	三十捆	千八百斤	三貫二百四十目	
房	寒	天	二百丸	一萬二千斤	百五十貫目
雞	冠	艸	三十九	三千斤	四貫五百目
三	石	昆布	三十九丸	三千六百斤	一貫二百六十目
計				三百六十二貫五百二十目	

8) 南國史話、150-164頁。

9) 中牟田倉之助傳、232頁。Mossman 前掲書 Paske-Smith 前掲書何れもこの貿易が不成功に終つた旨を述べてゐる。

10) 南國史話、160-164頁。

11) 南國史話、124-142頁。

(ロ)會所御圍の内

麻 苧	七丸	七十貫目	三貫七百四十四匁
五色絹糸	七十八包		六百四十三匁五分
紺蛇目傘	八本		六十匁四分
上棕ほうき	六十三本		百四十四匁九分
中棕ほうき	五十六本		百二十八匁八分
網代こつぶ	二十		二百九十八匁
同 うね組	二十		百四十二匁八分
同 小形ばん入	五十		八百四匁
籠着 猪口	二百		三百五十七匁六分
同 德利	五本		十四匁六分五厘
網代巻多葉粉入	七ツ		九十一匁七分
網代丸筒大形巻多葉粉入	五ツ		七十九匁三分五厘
同 小形	五ツ		八十二匁九分
溜塗蒔繪ばん入	五ツ		百六十九匁六分五厘
蒔繪 印籠	一ツ		二百八匁三分七厘二毛二弗
蒔繪縮根付共	一揃		二百四十六匁九分六厘
高蒔繪 卓	四ツ		
		二貫四百三十九匁四分一厘六弗	
高蒔繪 文臺	一脚		七百八十三匁三分八厘九毛三弗
同 机	一脚		四百二十二匁五分二厘四毛八弗

高蒔繪鼻紙棚

同 料紙硯箱	一組	一貫百九十七匁八厘七毛五弗
同 烟 管	五本入	四百六十三匁四分二厘八毛
	十箱	四百八十匁四分二厘四毛
	五本入	五箱
		二百四十七匁一分六厘一毛五弗

(ハ)市中御買上

青貝二番針差	五箱	三百十八匁五分
青貝三番布袋形針差	三箱	二百九十四匁
錦手皿附蓋茶碗	一箱俱十二組入	百七十六匁四分
桑細工寄木簞笥	一ツ	四百六十八匁(金六兩二歩)
梨子地蒔繪緋紐付文庫	二箱	二百九十匁
同 山水蒔繪料紙硯箱	一組	四百三十匁
本金梨子地蒔繪同	一組	六百五十匁
角切扇蒔繪硯蓋	二枚	五十匁
草木蒔繪 硯箱	五枚	二百十五匁
草木花鳥蒔繪同	五枚	二百匁
計		十五貫七百二十七匁一分三厘七毛三弗 <sup>12)</sup>
鯉 節	二箱 百斤	五百五十匁
五 倍 子	三百四十六斤	七百二匁九分一厘
一 番 鰯	三千斤	十二貫九百匁
二 番 鰯	二千五百五十斤	五貫七百七十匁九分四厘
棕 呂 皮	五千六百八十七斤	九貫七十六匁二分

12) 合計高に誤差あるも原文のまゝを掲ぐ、他にも同様の例あり。

幕末の上海貿易

卷 烟 草 二十六箱(一箱三十日入)	七百八十目
秤千木るい	五斤 九十四匁三分
中廣紋絹	五疋 二貫百目
同島郡内	五反 一貫七十目
中巾島郡内	十反 一貫七百七十五匁
島 郡 内	十疋 一貫四百目
米 澤 織	三疋 六 百 目
絹 日 田 織	十反 四百五十五匁
島 越 後	四反 四百三十一匁五分七厘
緋山舞ちりめん	一疋 六百二十目
緋 板	三丈五尺三寸 二百 目
同	四丈四尺六寸 二百五十二匁
同	四丈五尺八寸 二百五十二匁
緋 鹿 子	一切(一斤) 百六十八匁
緞 子	一 反 四百九十匁
色 海 黄	十 疋 九百五十目
形付木めん	三百五十反 七貫三百五十目
黒蒔繪三尺五枚入盆	三 組 四貫五百目
日野蒔繪足付大廣盆	一 枚 九 百 目
同三尺廣盆	一 枚 二百八十目
形 付 紙	五千枚 五百九十目
會津産和人參	二千五百斤 四百十七貫五百目
雲州和人參	二千五百斤 五百 貫 目

第四十六卷 七八六 第五號 一三六

石 炭	二十五萬斤	二十 貫 目
計		九百三十七貫五百目
合 計	一千三百七十貫十匁五厘七毛三弗	
二、本商人仕出の分		
房 寒 天	三十九千八百斤	十九貫八百目
三ツ石昆布	百六十七丸 二萬六千四百二十四斤	
	二十八貫五百三十七匁九分二厘	
參 葉	四 丸 二百斤	四 貫 目
髭 人 參	四 丸 二百二十斤	八貫八百目
白 糸	二 丸 百二十斤	十六 貫 目
樟 腦	二 桶 百三十四斤	一貫四百七十四匁
紙 烟 草 入	二十三箱(但數千入)	四十一貫四百目
藤細工時計鎖	五百筋	九 貫 目
友染模樣布	四十四反	四貫二百六十八匁
色 海 黄	九十疋	八貫五百五十目
卷 烟 艸	三十箱(但五百本入)	一貫三百五十目
合 計	百四十三貫百七十九匁九分二厘	
二口總計	一千五百十三貫百八十九匁九分七厘七毛三弗	

Paske-Smith の書には 600 toons in all とあるから積量ではそれだけのものではあらう。返り荷として買入れた商品は次の如くである。<sup>13)</sup>

黒花色吳羅服連	百 反	代銀五貫四百目
尺 長 更 紗	四百五十反	六貫三百目

13) 南國史話、154-158頁。



い	一番毛氈	千枚	六貫四百五十匁
ろ	一番毛氈	七百枚	四貫二百目
水	銀	二千八百十二斤五合	
		十四貫百四十六匁八分七厘五毛	
枳	實	五丸 千四百三十四斤	一貫二百九十匁六分
胡	椒	五十袋 三千百三十八斤	二貫二百五十九匁三分六厘
太	楓子	三十三丸 七千百三十四斤	一貫四百二十六匁八分
麻	黃	二十三丸 四千二百三十一斤八合三勺	二百五十八枚一合四勺
甘	草	三千六百九十九斤三合	百六十二枚七合七勺
同		八千六百六十九斤	三貫四百六十七匁六分
鈴		四萬二千七百七十斤	二十七貫九百五十八匁七分一厘
大	黃	二十三丸 六千六百九十五斤	八貫五百六十九匁六分
水	砂	二萬九千二百斤	二十六貫二百八十匁
石	膏	二萬四千五百五十七斤	二貫四百十五匁七分

幕末の上海貿易

計 日本銀 百十貫百六十五匁二分四厘五毛

洋銀 四百二十枚九合一勺

此換算 日本銀 三貫二百四十一匁七毛

總計 百十三貫四百六匁二分五厘二毛

幕府はこの貿易のために洋銀三千弗を準備し、更に上海の和蘭領事館宛に二萬七千弗の爲替を組んでゐるから、資銀の總高は洋銀三萬弗であつたが、返り荷は本商人だけの仕入であるから、右の三萬弗は航海費滞在費その他の費用に用ゐられたものゝ如くである。<sup>14)</sup>

### 五、貿易の意義

千歳丸による第一次の官貿易は大體以上の如くであつて、幕府はこのために特に船を買入れ、十數名の役人が特別の支給を受けて出張し、船長には片道百弗の給銀を支拂ひ、十餘名の水夫船夫にも相當の給銀を拂ひ、和蘭領事館員、上海道臺にも鈔からぬ贈物をなし、かくて三萬弗の資銀を費消してゐるが、又一方では輸出商品は一切無税として取扱ひ、運賃も無賃で上海へ運漕したわけであり、幕府としては勿論損益を度外し

14) 同上、164頁。

て輸出試賣のために之を行つたものである。而して商  
品賣買の成績は上述の如くであつた。同行の長崎商人  
三人は翌文久三年二月に幕府から『唐國上海に差遣し  
骨折相勤候に付御褒美』として賞典に預つてゐる。<sup>15)</sup>

「中牟田倉之助傳」によると、幕吏のいふ所では、此  
渡航は商人の貿易を主とし、幕吏は保護監督のために  
同行せしものであるが、高杉晋作の見るところでは、長崎  
商人が長崎奉行高橋美作守と謀り私利を營まんため畫  
策せるものである。従つて貿易の事は商人及長崎地役  
人に一任して願ふことなく、商人は通詞と結び、通詞  
は萬事外人と協議するため、結局英蘭人に僞購せられ  
了るとあるが、幕府としては所謂出貿易の試みを實行  
するために尠からぬ努力を拂つたものである。

## 六、健 順 丸

翌文久三年幕府は健順丸を再び上海へ遣すことに決  
した。この船はもと米國船で *Albatross* 號といひ、木造帆  
船三本檣三七八噸で、一八五六年（安政三年）米國フェ

ールヘーウン市にて製造された。文久元年（一八六一  
年）九月幕府は箱館に於て持主ルースより二萬二千弗  
で購入したものである。<sup>17)</sup>

之より前、箱館奉行は安政元年二月に出貿易のこと  
を幕府に建議し、文久元年正月再び之を建議し、同年  
四月遂に奉行所々屬船龜田丸をニコライエフスクに遣  
したが、文久二年五月に健順丸を香港・蘭領バタビア  
に派して貿易せんとし海産物を積載して箱館を發し、  
品川へ至つたが物議のため遂に中止した。翌文久三年  
十月幕府はこの健順丸を上海へ遣すことに決し、同船  
は十一月十一日品川を發して兵庫に至り、翌元治元年  
二月九日兵庫を解纜し二十一日上海に着、滞在約一ヶ  
月半、四月九日上海を發し途中長崎及兵庫に寄港、七  
月十日品川に歸着した。<sup>18)</sup>

健順丸の乗組員は軍艦奉行支配組頭次席箱館奉行支  
配調設並山口錫次郎、外國奉行支配調役格通辯御用頭  
取森山多吉郎その他箱館奉行所屬役人七人、松平越前  
守家來二人、商法方として蛭子砥平・西田屋文兵衛の

15) 同上、164-166 頁。

16) 中牟田倉之助傳、222 頁。

17) 海軍歴史、444 頁。日本近世造船史、82 頁。

18) 北海道史第一、885-889 頁

二人、船員水夫を加へて一行五十餘人であつたが、乗員が全部日本人であつたことは千歳丸の場合と異り注意すべき點である。本船上海派遣の目的については石渡博士は『(一)外國貿易(二)隠れたる使命即ち生麥事件の後始末に就き上海滞在の英國官憲との交渉(三)航海術上より見たる冒險事件、船は西洋形風帆船、其乗員は全部日本人、然も其航路は日本人未知の海洋なるを以て日本交通史上特書すべき大事業』の三點を擧げて居られるが、生麥事件との關係については尙調査を要することであらう。その主たる目的が貿易に在ることはいふ迄もないことであり、山口錫次郎の墓銘にも『駕艫船健順丸渡航上海從事北海産物之貿易蓋遵命也』と記されてゐる如く、北海の海産物を彼地に賣し、之に對して砂糖・綿・水銀等を買入れたといはれてゐる。その詳細なる事情を知り得ないことを遺憾とする。<sup>19)</sup>

降つて慶應二年四月には『海外諸國へ向後學術修業又は商業のため相越度志望の者は願出次第御免許可相成候』<sup>20)</sup>と令し、同年十月にも重ねて同趣旨の觸を發し

商業のため海外へ渡航することを公許するに至つた。

## 七、結 言

以上述べたる千歳丸による第一次の上海貿易、健順丸による第二次の上海貿易は、その收支損益の如何に拘らず何れも幕府自ら出貿易を試みたる事例として極めて重要な意義を有するものであるが、また之によつて種々海外の見聞を廣めたことも一大收穫であつたといはなければならぬ。更に日本船員による大洋航海の實現も我交通史上注目すべき事件であり、更に外國船舶の購入が、幕府及各藩に於て、此後續々行はれ、それ等に對する一の先例となつたことも注意すべきであらう。<sup>21)</sup>

かく考ふるときは幕府の第一次及第二次の上海貿易が、單に居貿易より出貿易への發展のみならず、幾多重要なる意義を有するものなることを忘れてはならぬ。

- 19) 新村出、元治元年に於る幕吏の上海視察記(商業と經濟、第五年第二册) 武藤長藏、文久二年の官船第一次上海派遣と文久三年一元治元年の第二次上海派遣に關する史料に就て(同上)。武藤長藏、元治元年上海派遣官船健順丸に關する長崎側の史料(商業と經濟、第六年第一册)。武藤長藏、元治元年上海派遣官船健順丸に關し石渡博士提供の史料(同上、翌八年第一册)。
- 20) 日本財政經濟史料、第三卷 588-589頁。 21) Paske-Smith, *ibid.* p. 223.